

参考文献

1. 木原正博、木原雅子他. アジア太平洋地域のエイズ流行の現状と展望. 日本性感染症学会誌 14:12-20, 2003.
2. 厚生労働省エイズ発生動向調査
3. 母子保健の主なる統計
4. 木原正博、木原雅子. エイズ問題が照射する日本社会の脆弱性. 世界 722: 102-110, 2004
5. CDC, MMWR
Sep. 29, 2000/49(38);861-864
6. Nelson KE et al : Infectious Disease Epidemiology-Theory and Practice, An Aspen Publication, Maryland, 2001, 149.
7. Centers for Disease Control and Prevention : HIV Prevention Strategic plan through 2005. January, 2001
8. 東京都幼・小・高・心障性教育研究会 : 二〇〇二年調査児童・生徒の性, 学校図書, 東京, 2002, 97
9. 木原雅子他 : 厚生労働省HIV感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学研究班平成16年度報告書, 2005, 48.
10. 木原正博他 : 教育アンケート調査年鑑上巻, 創育社、東京、2001, 94.
11. 木原雅子他 : 教育アンケート調査年鑑上巻, 創育社、東京、2003, 359.
12. 木原雅子他 : 教育アンケート調査年鑑上巻, 創育社、東京、2001, 105.
13. 木原雅子他 : 厚生労働省HIV感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学研究班平成14年度報告書, 2003, 282.
14. Hubert M et al : Sexual behavior and HIV/AIDS in Europe, UCL Press, London, 1998, 266.
15. 木原雅子他. 若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究. 厚生労働省HIV感染症社会疫学研究班平成15年度報告書, 2004
16. 木原雅子他. 若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究. 厚生労働省HIV感染症社会疫学研究班平成17年度報告書, 2006
17. Resnick, MD et al. Protecting adolescents from harm. Findings from the National Longitudinal Study on Adolescent Health. JAMA. 278(10):823-32, 1997
18. Andreasen AR. Marketing social change. Jossey-Bass, San Francisco, 1995
19. Glanz K. et al. Health behavior and health education-theory, research and practice 3rd edition. Jossey-Bass, San Francisco, 2002.
20. Kotler P, Roberto E, Lee N. Social marketing 2nd edition, Sage Publications, Thousand Oaks, California, 2002
21. National Cancer Institute. Making health communication programs work.
<http://www.nci.nih.gov/pinkbook>
22. 木原雅子. 10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点. ミネルヴァ書房、京都、2006.

地方自治体における青少年エイズ対策/教育ガイドライン

—若者の性行動の現状とWYSHプロジェクトの経験—

2005年3月31日 発行

代表者 木原 雅子

連絡先 京都大学大学院医学研究科
社会健康医学系専攻社会疫学分野
〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町
TEL:075-753-4350 FAX:075-753-4359

本ガイドラインの内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・
出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。



Well-being of Youth in Social Happiness

II. 研究成果の刊行に関する一覧表

(丸印は、別冊を貼付のもの)

著書

1. 木原雅子. 10代の性行動と日本社会ーそして WYSH 教育の視点.(2006) ミネルヴァ書房、京都.
2. 世界基金支援日本委員会. 三大感染症に対する東アジアの地域的対応. 世界基金支援日本委員会 2006
3. 木原正博. Q4:日本では HIV 感染者は増えていないと聞きますが本当ですか. HIV Q&A 第2版、医薬ジャーナル社、2006年
4. 木原雅子. Q5:日本で今後感染者の増加が危惧される原因は何か. HIV Q&A 第2版、医薬ジャーナル社、2006年
5. MAP report. Male-male sex and HIV/AIDS in Asia, 2005
6. MAP report. Sex work and HIV/AIDS in Asia, 2005
7. MAP report. Drug injection and HIV/AIDS in Asia, 2005
8. 木原雅子、木原正博訳. 医学的研究のデザイン第2版, MEDSI、東京、2004
- ⑨. 木原正博, 木原雅子. HIV の疫学. 性感染症(STD)(熊澤浄一, 田中正利編),南山堂, 東京, 2004
- ⑩. 木原雅子, 木原正博. 若者の性行動. 性感染症(STD)(熊澤浄一, 田中正利編),南山堂, 東京, 2004
11. 木原雅子、木原正博他. 「首都圏 10代カップルの日常生活・HIV/STD 関連知識・行動に関する調査」教育アンケート調査年鑑、上、2003
12. 木原雅子. 子ども最前線「日本の青少年の性行動とエイズ予防~性感染症の有効な予防対策の可能性」、子ども白書(2003)、子どもを守る会(編)1、草土文化社、東京

論文(総説)

1. 木原正博. アジアエイズパンデミック. CURRENT THERAPY 24: 101, 2006
2. 木原正博、岩本愛吉、長谷川博史. ICAAP 神戸を振り返って. Confronting HIV2006: 1-4, 2006
- ③. 安田直史、樽井正義、木原正博. 東アジアにおける HIV/AIDS 流行の現状と課題. 日本エイズ学会誌 7:77-82, 2005
- ④. 木原雅子. 性行動ーその実態・社会要因と WYSH 教育の戦略. 学校保健研究 47: 501-509, 2006
5. 木原雅子、木原正博. HIV 感染症の疫学ー現状と今後. BIO Clinica 20:23-28, 2005
6. 木原雅子. 予防教育は希望教育. 日本教育 337:5, 2005
- ⑦. 木原正博、木原雅子、Zamani S. 性的ネットワークと性感染症ーその理論と日本の現状. 日本医事新報 4284:7-12, 2005
8. 小野寺昭一. 無症候性性感染症の現状. 化学療法の領域 21:70-74, 2005
9. 小野寺昭一. わが国における性感染症の蔓延をいかに防止すべきか. 感染制御 1:228-232, 2005
10. 小野寺昭一. 性感染症の予防と将来. Urology View 2:93-97, 2005

11. 木原正博. アジアとわが国の HIV 流行の現状と展望 (MBC FORUM 05). アニムス特集号:4-11、2005
12. 木原正博、木原雅子他. わが国のエイズ対策と今後の展開. 厚生労働 1月号:8-15、2005
13. 木原正博、小松隆一、樽井正義、稲葉雅紀. エイズ問題と開発. DAKIS 課題別基礎情報, 国際開発研究機構. <http://dakis.fasid.or.jp/report/information/aids.html>
- ⑭ 木原正博. わが国の予防対策の歴史と展望. 日本エイズ学会誌. 6(3): 107-109, 2004.
木原正博、木原雅子. 性感染症の国際的動向—HIV 感染症を中心に. クリニカルプラクティス 23: 34-37, 2004
15. 木原雅子、木原正博. エイズ流行の現状とこれからの予防教育. 健 33: 24-29, 2004
16. 木原正博、木原雅子. 現代の青少年と性感染症/エイズ—現状、背景、予防対策のあり方. 月刊保団連 806:4-9, 2004.
17. 木原雅子. 心でつながる楽しさを知って欲しい. 教育ジャーナル 11月号: pp42-47,2004
18. 木原雅子. 青少年の性行動の現状とこれからの予防対策のあり方について—科学的予防 (science-based prevention)の導入. 学校保健研究 46 : pp149-154, 2004
- ⑮ 木原正博、木原雅子. エイズ問題が照射する日本社会の脆弱性. 世界 722:102-110, 2004
20. 木原雅子. 日本人の性行動と性教育. *Confronting HIV 2003, no.23, 1-3, 2003*
21. 木原雅子、木原正博. 日本の若者の性行動の現状と今後の性感染症予防教育のあり方—科学的予防の導入. 治療学 vol.37,no.8, 61-65, 2003
22. 木原雅子、山崎浩司. エイズ・HIV~現状とこれからの取り組み. 健、特集 2、21-27、2003年12月
23. 木原雅子. データに見る子どもたちの性行動の実情、9月号、教育ジャーナル、学習研究社、2003
24. 木原雅子. 性の問題を子どもたちとどう真剣に話すか、10月号、教育ジャーナル、学習研究社、2003
- ⑯ 木原正博、木原雅子. HIV 感染症の社会疫学. 現代医療 35:60-64, 2003
26. 市川誠一、木原雅子、木原正博. エイズ啓発を振り返って. 日本性感染症学会誌 13(1)、26-31、2002
27. 木原正博. HIV 感染症・日本の現状. *Current Concepts in Infectious Diseases 22: 16-17, 2003*
28. 木原雅子、木原正博. 日本の若者の性意識・性行動の現状. 健康教室 54: 66-71, 2003
29. 木原正博、木原雅子. エイズの今後・若者のエイズの時代へ. 健康教室 54: 80-84, 2003
30. 木原正博、木原雅子. 変貌する性行動・発達する危険な性的ネットワーク. 臨床と研究 80: 1-4, 2003
31. 木原正博. 日本及びアジアにおけるエイズ流行の現状と課題 海外医療 30: 6-12, 2003
32. 木原正博、木原雅子. 日本のエイズ流行の現状と今後の課題. 現代医療 35: 148-152, 2003

33. 木原正博, 木原雅子. 日本における HIV 感染症の流行とそのリスク. 臨床とウイルス 31: 245-250, 2003
34. 木原雅子, 木原正博. エイズ予防教育のエビデンス. 病原微生物情報 24: 3-4, 2003
35. 木原雅子, 木原正博. 実効あるエイズ予防教育. 教育と医学 8: 56-62, 2003
36. 木原正博, 木原雅子, 小堀栄子, 山崎浩司, 小松隆一. アジア太平洋地域のエイズ流行の現状と課題. 日本性感染症学会誌, 14: 12-20, 2003
37. 木原正博, 小松隆一. エイズ対策の体系と今後の国際援助戦略について 国際協力研究 16:1-12, 2003
38. 小松隆一, 木原雅子, 木原正博. わが国のエイズ対策の省察と今後の展望. 公衆衛生 67:8-11, 2003

論文 (原著)

1. Vazirian M, Nassirimanesh B, Zamani S, Ono-Kihara M, Kihara M, Ravari SM, Gouya MM. Needle and syringe sharing practice of injecting drug users participating in an outreach HIV prevention program in Tehran, Iran: A cross-sectional study. (2005) Harm Reduction Journal 2:19 doi:10.1186/1477-7517-2-19
2. Zamani S, Kihara M, Gouya MM, Vazirian, M Ono-Kihara M, Razzaghi EM, Ichikawa S. Prevalence of and factors associated with HIV-1 infection among drug users visiting treatment centers in Tehran, Iran. (2005) AIDS 19:709-716.
3. Kihara M, Komatsu R. The response to the AIDS epidemic and the strategy for the international collaboration. (2005) Technology and Development 18:5-14
4. Matsumoto T, Asami T, Iseki E, Hirayasu Y, Wada K. Drug preferences in illicit drug abusers with a childhood tendency of attention deficit/hyperactivity disorder: A study using the Wender Utah Rating Scale in a Japanese prison. (2005) Psychiatry and Clinical Neurosciences 59: 311-318
5. Wada K, Nakayama K et al. Symptomatological structure of volatile solvent-induced psychosis: Is "solvent psychosis" a discernible syndrome?. (2005) Japanese Journal of Alcohol Studies & Drug Dependence 40: 471-484
6. 山崎浩司, 木原雅子, 木原正博. 地方 A 県女子高校生のコンドーム不使用に関する相互作用プロセスの研究. (2005) 日本エイズ学会誌 7:121-130
7. 北川信一郎, 木原雅子, 田原紀子, 土井渉, 木原正博. 保健所における HIV 抗体検査の頻回受検者の特性に関する研究. (2005) 日本エイズ学会誌 7:49-53
8. 橋本修二, 井上洋士, 川戸美由紀, 村上義孝, 木村博和, 市川誠一, 中村好一, 木原正博, 福富和夫. HIV 感染からその自覚と医療施設の受診までの時間的遅れ. (2005) 日本エイズ学会誌 7:31-36
9. Inoue, Y., Seki, Y., Wakabayashi, C., Kihara, M., Yamazaki, Y. Sexual Activities and Social Relationships of People with HIV in Japan: AIDS Care 16(3):349-362, 2004.
10. Choi, K.H., McFarland, W., Kihara, M. HIV prevention for Asian Pacific islander

men who have a sex with men: identifying needs for the Asia Pacific region. *AIDS Education and Prevention* 16: v-vii, 2004

- ⑪ Hashimoto S, Kawado M, Murakami Y, Ichikawa S, Kimura H, Nakamura Y, Kihara M, Fukutomi K. Numbers of people with HIV/AIDS reported and not reported to surveillance in Japan. *J. Epidemiol.* 14:182-186, 2004
- ⑫ Matsuyama Y, Yamaguchi T, Hashimoto S, Kawado M, Ichikawa S, Umeda T, Kihara M. Epidemiological characteristics of HIV and AIDS in Japan based on HIV/AIDS surveillance data: a international comparison. *日本エイズ学会誌.* 6(3) : 184-193, 2004
13. 日高庸晴, 市川誠一, 木原正博. ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究. *日本エイズ学会誌.* 6(3):165-173, 2004.
- ⑭ 井上洋士, 村上未知子, 有馬美奈, 市橋恵子, 大野捻子, 山元泰之, 岩本愛吉, 木原正博 HIV 感染者のセクシャルヘルスへの医療従事者による支援に関する研究. *日本エイズ学会誌.* 6(3) : 174-183, 2004.
15. 川戸美由紀, 橋本修二, 山口拓洋, 松山 裕, 中村好一, 木村博和, 市川誠一, 木原正博, 白阪琢磨. エイズ拠点病院における HIV/AIDS の受療者数の推移. *日本エイズ学会誌* 6:31-36, 2004

III. 研究成果の刊行物・別冊(抜粋)

(II. 研究成果の刊行に関する一覧表で丸印をしたもののみ収載)

性感染症

STD

Sexually Transmitted Diseases

九州大学名誉教授 熊澤 淨一 編集
福岡大学医学部 泌尿器科学教授 田中正利



南山堂

なることが危惧される。

性感染症（STD）の予防には自己管理の徹底と予防教育が重要である。まず STD の予防，蔓延の防止策として STD に関する知識の普及，啓発（情報公開を含む），予防対策（コンドームなど）や避妊法，早期検査と治療の普及を一層痛感させるものがある。平成14年度から実施される文部科学省の新学習指導要領に示された内容をどのように実施していくかが問題であるが，中学3年生に STD の教育として，疾病概念，感染経路，予防法を身に付ける必要があることを理解できるようにすることである。しかし中学生を取り巻く社会環境の影響は大きく，マスメディアを通して流される性情報や，ポケベル，携帯電話などからの情報，大人社会での性風俗などの影響は，価値観の多様化とともに近年の中学生の性意識や性行動に大きな影響を及ぼしている。

高校生の性教育に関しても同様なことがいえよう。わが国では，最近21世紀における母子保健の国民運動計画（2001～2010年）として「健やか親子21」（厚生労働省，文部科学省，日本医師会ほか各種50数団体による）という推進事業が発足し，その大きな柱の一つに10代の性感染症罹患率の減少と10代の人工妊娠中絶の減少を取りあげているが，これらの成果が期待される。

以上 STD は近年若者を中心に着実に増加の傾向をたどっており，現在医療機関にかかっていない隠れた感染症も数多いということ踏まえ，予防対策の重要性（性教育，個人個人の自己管理，検診率の向上，コンドームの使用など）と適切な治療を強調した。問題はパートナーの検査と治療であり，わが国では，この点が不十分なのが現状である。

B 若者の性行動

1990年代半ばから，クラミジアや淋菌感染症などの性感染症や10代女性の人工妊娠中絶率が急上昇をはじめた。これらのデータは，わが国の若者の間で無防備な性行動が増加したことを示唆している。アジアで近未来にエイズ大流行が予測され，わが国における HIV 流行も年々進行を続けるなか¹⁾，若者の性行動の動向と実態を把握することは，今後の予防対策を考えるうえで不可欠である。本稿では，主にわれわれがこれまで実施してきた種々の性行動調査のデータから，若者の性行動を分析し，さらにそれを性的ネットワークという観点で整理することによって，今後の HIV/STD 流行における意味を明らかにしてみたい。

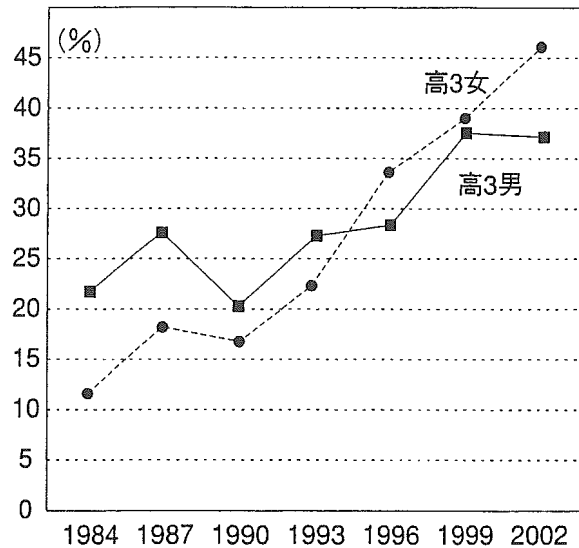


図37. 東京都性教育協会の性意識・性行動調査

○ 1. 東京都性教育協会の性意識・性行動調査 (1987～2002年)

図37は、わが国で唯一、長期にわたって実施されてきた東京都性教育協会の性意識・性行動調査¹²⁾から、高校3年生の性交経験率の変化をグラフ化したものである。1990年代に入ってから男女とも、性交経験率が急速に上昇し、その変化が特に女性で顕著であったことがわかる。1990年に21%、17%であった高校3年生男女の経験率は、2002年には、それぞれ37%、46%に達し、この間に男女逆転してしまった。女子における変化がいかに大きかったかを示している。

○ 2. 全国性行動調査 (1999年)

低用量ピル解禁直前の1999年6～7月に、旧厚生省 HIV 疫学研究班による全国初の性行動調査が2年間の基礎研究を経て実施された(18歳から59歳、ランダム抽出、回収率71%、回答者数3562名)¹³⁾。この調査の世代間比較によって、現代の若者の性行動の特徴が初めて詳細に明らかになった。

性交経験率は、男女とも25歳以上で95%以上、18～24歳で65%前後であったが、その中で10代に性交を経験した人の割合は、55歳以上では、男30%、女11%であるのに対し、18～24歳の年齢層では、男女共に79%に達しており、男女格差はほぼ消失してしまった(図38a)。また、性交経験者中で、過去1年間に2人以上のパートナーを経験した人の割合は、若者では、男50%、女40%と他の年齢層から際立って高い値を示し(図38b)、生涯の性的パートナー数が5人を超える人の割合は、男性では、35～44歳にピーク(57%)を示すのに対し、女性では、55歳以上では2%、18～24歳38%と、年齢が若いほど割合が大きいという結

若者に見られる STD

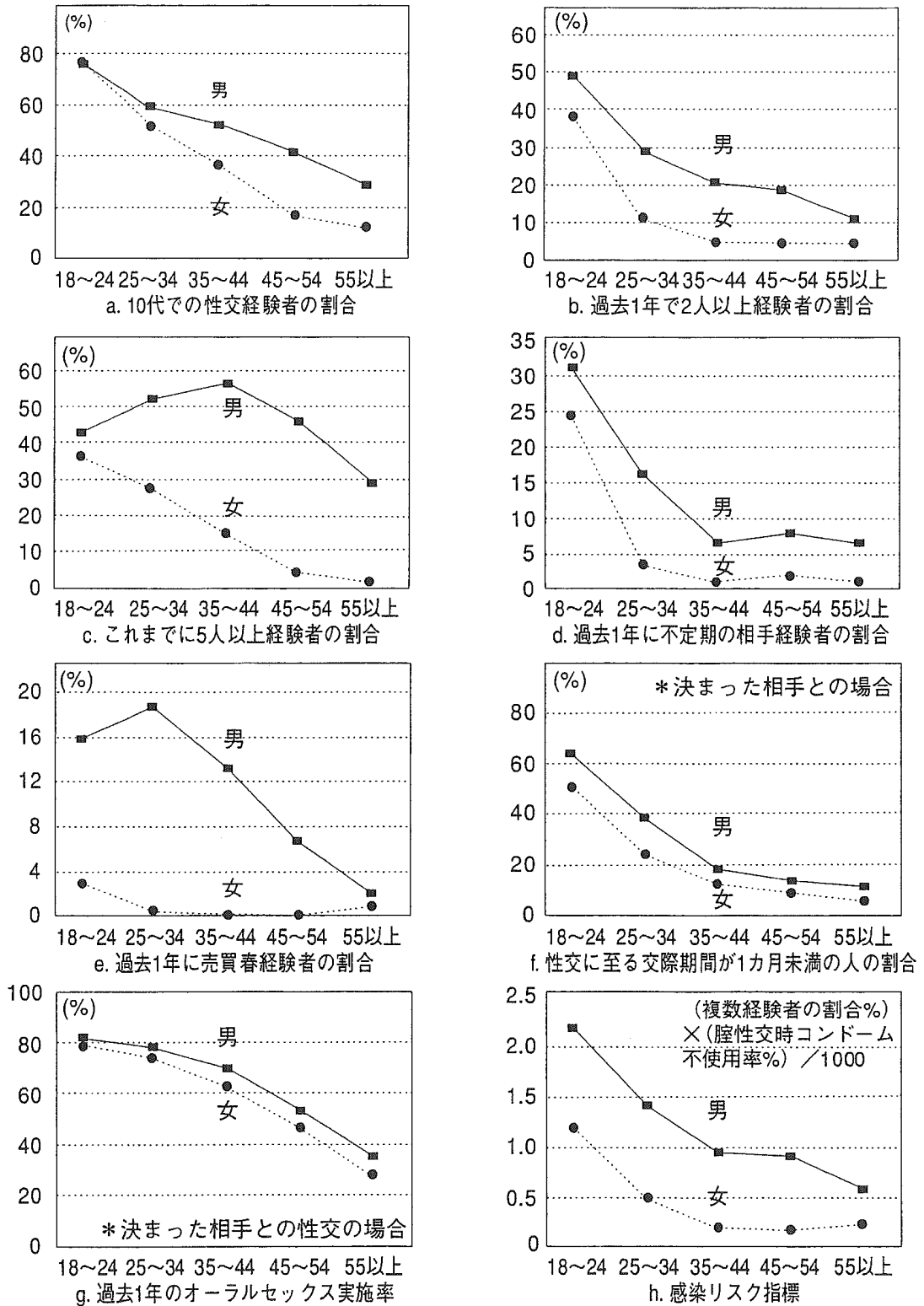


図38. 1999年全国性行動調査の結果 (すべて性交経験者中)

果になった。男女とも若年世代ほど多数の相手を持つ傾向が進んでいるが、女性における変化がとりわけ急速であったことがうかがわれる (図38c)。過去1年間の性的パートナーをみると、不特定の相手を持つ人の割合は、年齢が若いほど高く、特に、18~24歳の女性は他の年齢層の女性から際だって高い割合を示した

(図38d)。また、過去1年間に金銭を介するセックス(売買春)を行った人は、男性で平均11%にもものぼった(図38e)。重要なことは、最もその割合が高かったのは、中高年ではなく、むしろ若い世代であるということであり、若者層で15~20%にも及んでいる。これを他の先進国と比較すると、例えば、英米で1%前後、他のヨーロッパ諸国でもせいぜい数%程度であり¹³⁾、先進国の中で日本が突出した存在となっている。図38fは、決まった相手と性関係に至るまでの期間が1カ月未満であった人の割合を示したものであるが、18~24歳では、男63%、女51%であるのに対し、55歳以上の年齢層では、10%未満と、若者において、性関係に至る期間が著しく短縮していることが示唆された。性行為の多様化も進行しており、過去1年間の性行為のうち、オーラルセックス(フェラチオやクニニリングス)を行った人の割合は、55歳以上では20~40%の範囲であるが、18~24歳では男女とも約80%に達し、若者ではオーラルセックスが普通の性行為のひとつとなっている様子が見られる(図38g)。最も直近のセックスにおけるコンドーム使用率は、若い世代ほど高いという傾向があるが、複数パートナーの経験者割合と陰性交時コンドーム使用率を掛け合わせて算出したHIV/STD感染リスク指標は、若者で大きく、18~24歳男性、25~29歳男性、18~24歳女性の順に大きい値を示した(図38h)。

以上の結果から、近年性行動が若年化するとともに、若者では多数かつ多様な相手と多様な性交経験を持つ傾向が進んでいることがうかがわれ、HIV/STD感染に対して相対的に高いリスクに曝されていることが推察される。図38hは、クラミジアや淋菌感染症の年齢別罹患傾向⁴⁾とほぼ一致しており、この推察を裏付けるものとなっている。

次に、大学生、高校生らの調査から、若者の実態をさらに詳細に分析してみることにしよう。

● 3. 全国国立大学生調査(1999年)

1999年4~6月に、全国国立大学生を対象にした調査を実施する機会を得、91大学中26大学が参加した全国調査を実施することができた¹⁵⁾。参加校数と回収率(53%)に限界はあるが、参加校は全国に分散し、新1年生と新4年生合計13,000人以上のデータを分析することができた。

性交経験者は新1年生で、男24%、女22%で、新4年生では男64%、女74%であり、大学生時代にほとんどの学生が性行為を経験していく様子が見られる。そして性交経験者の中で、これまでに複数の性的パートナーを経験した人は、1年生で男43%、女35%、4年生では男64%、女56%であり、1999年時点で大学生

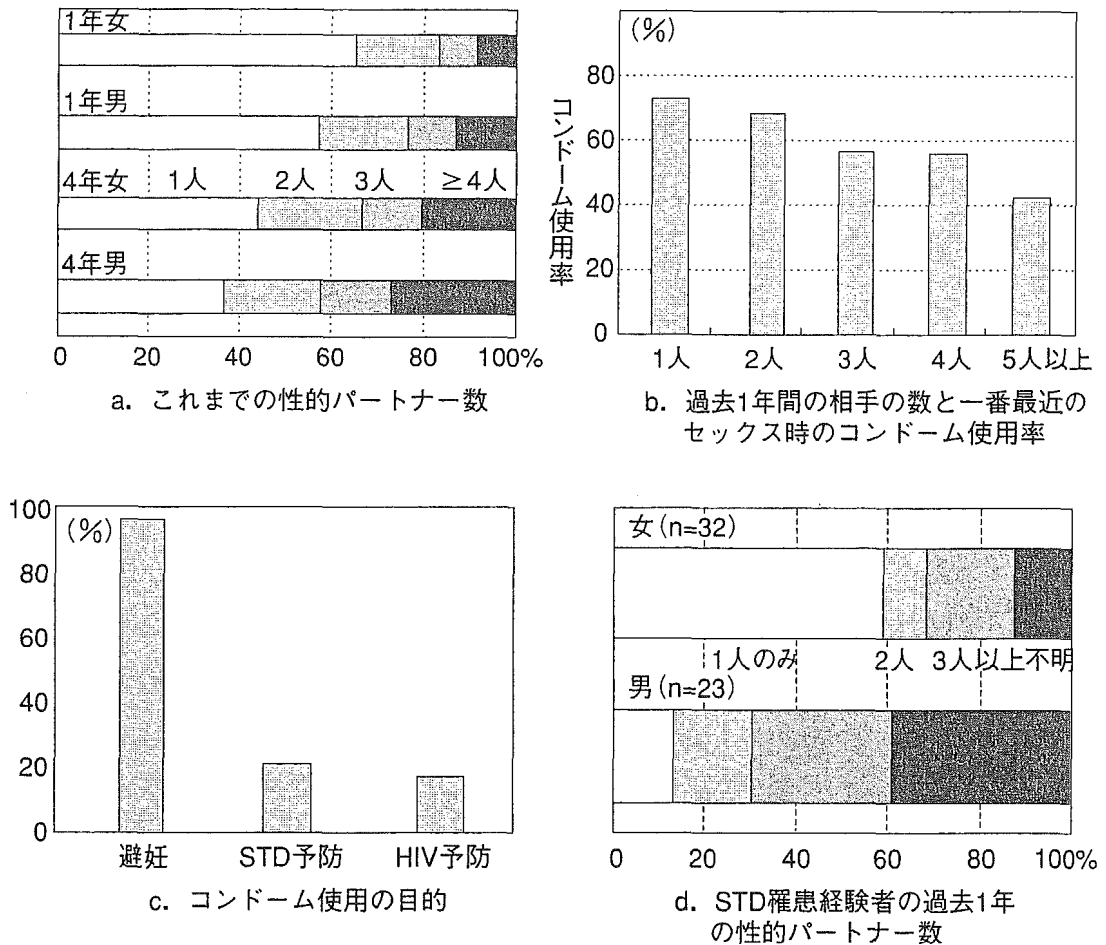


図39. 1999年全国国立大学生調査の結果

高学年では性交経験者の半数以上が複数の相手を経験する状態になっていたことが示された。また、4人以上の経験者も、1年生で男13%、女9%、4年生で男27%、女21%の割合で認められた(図39a)。また、同時期に複数の相手と性関係にあったことがあると答えた人も、1年生で10%程度、4年生で20%程度認められた。パートナーのタイプとしては、過去1年間に決まった相手がいた人の割合は、男では両学年ともに70%前後、女では80~90%と、女性で高率であったが、不定期の相手がいた人の割合は、男では1年16%、4年20%、女では、それぞれ11%、16%と、男で高率で、かつ学年が高いほど高率であった。一番最近の膣性交時におけるコンドームの使用率は、決まった相手との場合は男女平均74%と比較的高率であるが、不定期の相手の場合は、63%と低下し(注: 普段の常用率は、決まった相手50%前後、不定期の相手42%前後とさらに低率)、そして、過去1年間の相手の数との関連をみると、男女とも相手の数が多い人ほど使用率が低いという傾向のあることが明らかになった(図39b)。なお、コンドーム使用目的は、ほとんどが避妊であり、HIV/STD予防と回答した人は20%強に過

ぎなかった(図39c)。予防意識が乏しい中では、妊娠の責任を感じない不特定の相手(あるいは多数の相手)とは、コンドームを使う必要を感じないということであろう。この調査はピル解禁直前に行われたため、ピルに関する質問も行われたが、ピルがHIVやSTDの予防にならないことを正しく認識している人は、60%程度にとどまり、ピル解禁前の基本的知識の普及が十分なされていなかったことが明らかとなった。最後に、参加者中、過去1年間にSTDと診断された人は、男性0.8%、女性1.6%存在したが、それらの人々の性行動をみると、男性では、不特定の相手を持つ人や相手が多数の人が大半を占めるのに対し、女性では60%が特定の相手でかつ一人であることが判明した(図39d)。

本調査は、HIV/STDに関連して行われたわが国で最初の大規模な若者調査であり、結果は国立大学生という社会的イメージにかなり軌道修正を迫るものであった。また都会の大学と地方の大学の格差がほとんど認められなかったことから、全国的に同じような状況が進行していることが示唆された。また、本調査の特記すべき成績は、パートナー数の多い人ほどコンドーム使用が低いという若者社会の危険な実態や、かつ女性STD罹患患者では特定パートナーから感染した人の割合が高いこと(したがって、「不特定多数が危険」とする従来のキャンペーンに限界があること)を初めて示したことであり、その成績は文部科学省の指導マニュアルに取り入れられている¹⁶⁾。

● 4. 東京の街頭調査(2000年)

2000年度には、簡易サンプルによる首都圏街頭の若者カップルの性行動調査を実施した。この調査は、街頭での無差別なリクルートに応じた男女カップル(女性は13~19歳に限定、301組)を対象にして行われ、同じ番号のついた一組の質問票を男女独立して答えてもらうことによって、性行動のネットワーク化の状態を調べることを目的したものである¹⁷⁾。301カップル(602人)の対象者の平均性交経験率は78%であったが、性交経験者のうち、これまで複数のパートナーを経験している者は、男64%、女62%、4人以上のパートナーの経験者はそれぞれ39%、30%であった。性関係にあった243カップル中、これまでの相手がお互いに一人だけのカップルは17%、お互いこれまでの相手が共に4人以上のカップルが16%、少なくとも一方が4人以上のカップルが53%存在し、性行動が高度にネットワーク化している様子がうかがわれた。また、興味深いことに、パートナー数とコンドーム使用の関係に関しては、予期せずして上述の大学生調査とほぼ同じ結果が得られている。街頭調査の対象者の性行動は特別活発にも見えるが、実は性交経験者に限れば、パートナーの経験数に関しては、先述した国立大

学4年生と大差はなく、コンドーム使用態度の類似性からも、本調査で認められた性的ネットワークを特殊なものともみなす理由は見当たらない。

○ 5. 地方高校生の調査 (2001, 2002年)

筆者らは、次に、地方の高校生の性行動調査に着手し、2001年には、A県とB県、2002年は再びA県について調査を実施した^{18,19)}。いずれの調査も、高2を対象とし、各県下高校数の40~60%をカバーする大規模なものとなった。A県とB県の結果は驚くほど似た結果であるため、本稿ではA県の2002年調査(91高校中44校(48%), 7,935人参加)について、そのデータの一部を紹介する。

性交経験率は男24.6%、女31.3%で、2002年の東京都のデータ(高2)と比較しても差は10%に満たない(ただし、東京都のデータは数校分であるため真の比較は困難)。驚くべきことには、A県のデータを2001年と比較すると、わずか1年間に女子の性経験率が4%も上昇しており、15歳までの経験者の割合には10~20%もの大きな変化が見られた(図40a)。同じ分析を、2001年と2002年の調査の両方に参加した19校の高校2年生に限ってみても、ほぼ同じ結果になるため、A県の若者の性行動はなお急速に若年化を強めていることが示唆される。

性交経験者のパートナー数は、半数以上がすでに複数を経験しており、4人以上の経験者も、男女とも2割に達している(図40b)。現在つきあっている相手が高校生である者は、男約90%、女72%であり、女子高校生では、約4人に1人が年上の人(多くは社会人)を相手にしていることが注目された(図40c)。性交経験者中、コンドームを毎回使用(常用)すると答えた人は、男女とも30%と低率であり、コンドーム使用目的は、ほとんどが避妊で、病気の予防と答えた人は2~3割に過ぎなかった。また、パートナー数とコンドーム常用率との関係をみると、図40dに示したように、大学生調査や東京の街頭調査と同じく、それまでの相手の多い人(男+女)ほど常用率が低いという関係が認められた。4人以上と答えた人の常用率は15.6%に過ぎない。また、近年、出会い系サイトを利用した犯罪が大きな社会問題になっているが、A県の高校生では、男女とも10数%がこれまでに出会い系サイトを利用していることが判明した(図40e)。テレクラや援助交際を経験している人も若干存在しており、いずれも女子に多い。

次に、セックスという行為の意味を知った時期については、女66%、男57%が小学校までに知り、中学生までには、男女ともほとんどの若者が知ってしまうという実情にあることがわかった(図40f)。そして、その情報源としては、男女とも同性の友人が最多で、男では、そのほかに漫画、アダルトビデオ、雑誌、女では、漫画、テレビドラマなどがあげられており、学校の教師をあげた人は、男子

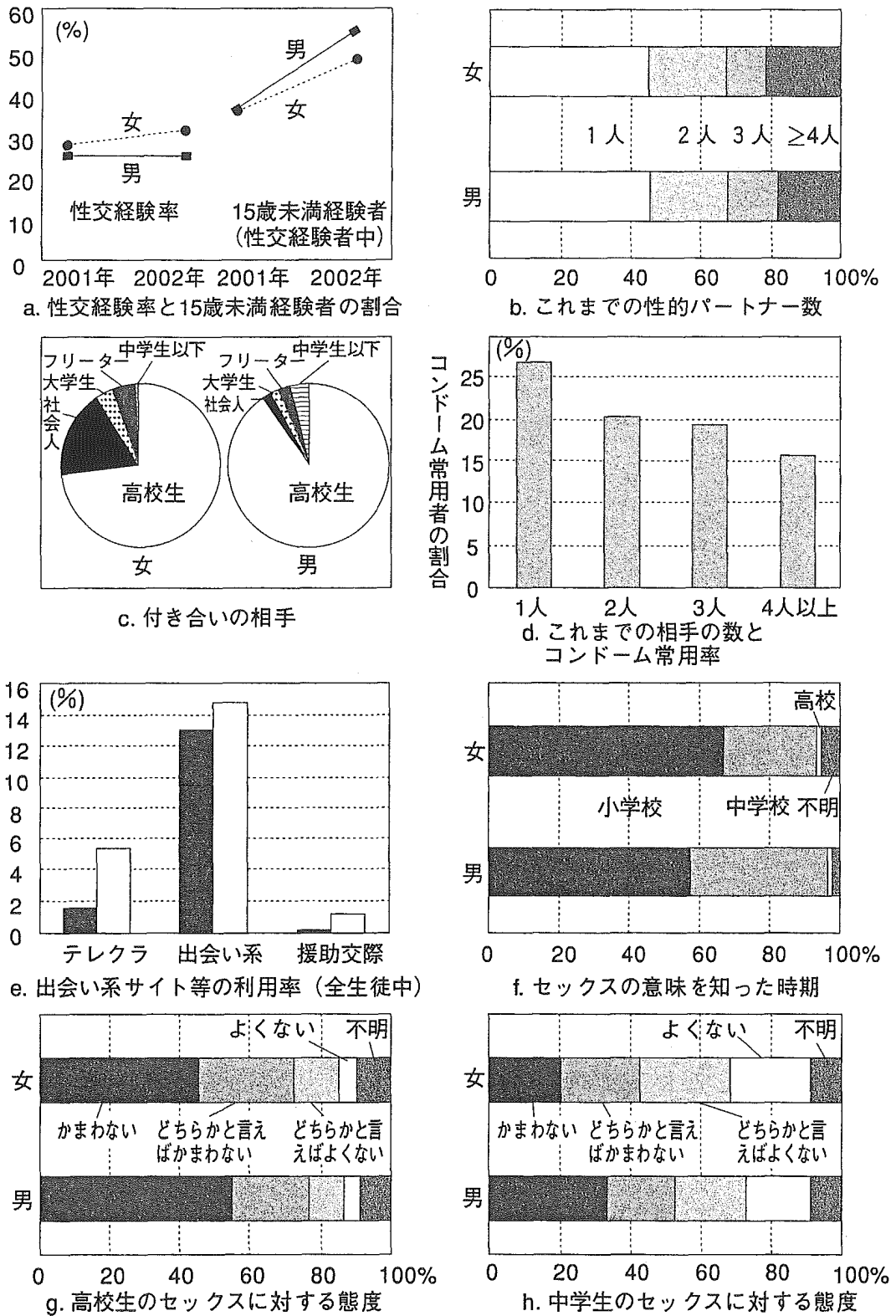


図40. 2002年A県高校2年生調査の結果

23%, 女子36%に過ぎなかった。不確かな情報しか知らず、セックスに伴う危険も知らずにセックスを経験していく若者の多いことがうかがわれる。

高校生や中学生のセックスに対する態度は、高校生のセックスについては、男

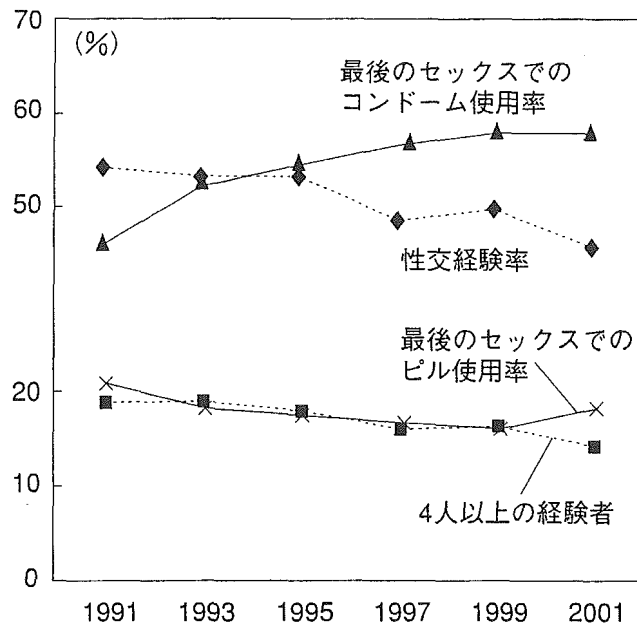


図41. 米国若者リスク行動調査の結果

女とも50%前後が「構わない」と答え、「どちらかと言えば構わない」を含めると70%以上を占めた (図40g)。また、中学生のセックスについても、男子53%、女子42%が、「構わない」「どちらかと言えば構わない」と回答しており、中高生のセックスを認める意識が若者間に広がっていることが示された (図40h)。

○ 6. 米国の若者との比較 (2001年)

では、米国の若者の状況はどうなっているのだろうか。米国では、1991年以来、2年おきに、第9～12学年 (日本の中3から高3) の若者を対象として、性行動を含めた種々のリスク行動に関するランダム抽出の全国調査²⁰⁾が実施されている。それをみると興味深いことに、日本とは逆に1991年以降、性交経験率やリスク行動が減少傾向にあることが観察されている (図41)。そして、2001年の調査結果から日本の高2に相当する第11学年をみると、生徒の52% (男54%、女50%) に性交経験があり、男子が女子より高率であった。4人以上の性的パートナーとの経験があるのは、平均15% (男18%、女13%) であった。3カ月以内に性活動がある生徒のうち、直近の性行為でコンドームを使用していたのは59% (男65%、女子53%) であった。パートナー数とコンドーム使用率の関係は、初期は日本と同じ傾向が示されていたが²¹⁾、最近では、パートナー数の多い者ほど、コンドームを使うという報告が多い^{22～25)}。

比較のために同じ2001年の日本の高校2年生のデータ (A県) をみると、性交経験率は男20%、女26%、パートナーの経験数は、男女とも半数以上が複数、

20%が4人以上を経験していた。直近の性交時におけるコンドーム使用率は、平均54%（男53%，女55%）であり、しかも、パートナー数の多い者ほどコンドーム使用率が低い。

調査方法の違いから、日本の高校生と米国の高校生を直接比較することは難しいが、性交経験率にはまだ開きがあるものの、米国では性交経験率やコンドーム使用は日本と逆の方向に向かっており、そしてもはや日本の若者の性交経験者の性行動は、米国より安全とは言えない状況にあることがうかがわれる。

○ 7. 若者の性的ネットワーク

STDやHIVの流行が、性行為で生じるとするのは、不正確であり、より正確には、“性的ネットワーク”の量と質によって決定される。性的ネットワークとは、過去現在を含めたセックスによる人と人のつながり合いであり（本書「IX. HIV感染症」の本文と図102参照）、その“量”とは、ネットワークの広がり（パートナー数）と密度（パートナー数）で、“質”とは、他のネットワークとの連結やコンドームの使用状況であり、HIV流行の場合はHIV感染を促進するSTDの流行状況もネットワークの質に関連する要因に数えられる。

このネットワークの観点から若者の性行動を整理すると以下のようなようになる。量の面では、①性行動の早期化と女性の活発化によって性的ネットワークは若年層と女性層に拡大している、②性的パートナー数の増加によってネットワークの密度が高まっている。一方、質の面では、①若者の性的ネットワークは、男では性産業とそれを利用する層の性的ネットワークと連結し、女性では、「社会人」とのネットワークと連結しており、外部からの流行が持ち込まれやすい構造となっている、②性的パートナーの多い人ほどコンドームを使わない傾向は、ネットワークをHIV/STD感染を広げやすいものにしており、③STDの蔓延は、HIVを流行させやすい性的ネットワークとしている。加えて注意すべきは、オーラルセックスの蔓延であり、コンドームがほとんど用いられていないこの性行為が、ネットワークにおけるSTDの伝播を促進する働きをしていると考えられる。このような無防備な性的ネットワークが都会と地方とを問わず、若者の間で相当発達し、かつ発達を続けているのがわが国の現状と考えるべきであろう。そして、こうしたネットワークはSTDやHIVを広げやすいものとして憂慮すべきものであるが、同時に薬物使用を促進するネットワークとも重なる可能性に注意が必要と思われる。薬物使用の蔓延と性的ネットワークは増幅作用を持つ危険があるが、そうしたことがもはや始まっている可能性もある。

それでは、こうした若者の性行動の問題にどのように取り組んでいけばよいだろうか。これまで国内のエイズ対策は、ポスター、パンフ、電話相談、文化イベント、有識者の講演などの一般的啓発事業が中心であった。また、スキル、ピアをキーワードとする対策も一部で試みられてきたが、残念ながらいずれをとっても、予防効果が科学的に提示されたことはない。ここで、予防対策に関して詳述する紙幅はないが、これまで効果を発揮し得なかった対策を見直し、地域や対象の状況やニーズを反映しかつ効果評価を伴った“科学的予防 science-based prevention”を定着させていくことが今後の展望を拓くと筆者らは考えている²⁶⁾。

参考文献

A. STD の最近の動向

- 1) 熊本悦明, 他: 日本における性感染症流行の実態調査—2000年度のセンチネル・サーベイランス報告. 日性感染症誌, 12: 32-67, 2001.
- 2) 松田静治: 産婦人科領域のSTD (現状: 検査, 診断), 性感染症/HIV 感染 (熊本悦明, 松田静治, 川名 尚編), 78-87, メジカルビュー社, 2001.
- 3) CDC: Sexually transmitted diseases surveillance 1999, Dept of Health and Human Services, CDC, Division of STD Prevention, 2000.
- 4) 感染症発生動向調査事業報告書 (平成13年), 東京都健康局, 2002.
- 5) 松田静治, 市瀬正之: 東京都におけるクラミジア・淋菌の検査成績について. 東京都予防医学協会年報, 32号, 2003年版 (平成13年度), 154-158, 2003.
- 6) 松田静治, 市瀬正之: 東京都におけるクラミジアトラコマチスと淋菌の検査成績. 東京都予防医学協会年報, 31号, 2002年版 (平成12年度), 158-163, 2002.
- 7) 赤枝恒雄, 松田静治, 熊本悦明: 女子高校生の自発的スクリーニングによるクラミジア, 淋菌, HPV 検出率. 日性感染症誌, 12: 2-34, 2001.
- 8) 木原雅子, 木原正博: 日本のエイズ流行の展望と性感染症予防の戦略. 日本医事新報, 4066: 37-42, 2002.
- 9) 木原正博, 木原雅子: 現代の若者の性行動とエイズ/性感染症流行. 性と健康, 1: 18-20, 2001.
- 10) 第25回日本産婦人科医会性教育指導セミナー集録: 松田静治ほか, 2002年7月7日, 提供.

B. 若者の性行動

- 11) 木原正博 他: アジア太平洋地域のエイズ流行の現状と展望. 日本性感染症学会誌, 14: 12-20, 2003.
- 12) 東京都幼・小・高・心障性教育研究会: 2002年調査児童・生徒の性. 学校図書, 2002.
- 13) 木原正博 他: 日本人の HIV/STD 関連知識, 性行動, 性意識についての全国調査. 教育アンケート調査年鑑上2001, 94-105, 創育社, 2001.